

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00576

研究課題名(和文) 日本手話における空項に関する統語研究

研究課題名(英文) A Syntactic Study of Null Arguments in Japanese Sign Language

研究代表者

上田 由紀子 (Ueda, Yukiko)

山口大学・人文学部・教授

研究者番号：90447194

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本手話(以下JSL)において、目的語が音形を持たない文(以後、現象として「目的語省略文」)の派生を明らかにすることであった。同種の文に関する音声言語における主な統語分析としては、(i)動詞を繰り上げ後、vP(動詞句)を削除する「動詞残留型VP削除分析」と(ii)目的語だけを削除する「項削除分析」があげられる。本研究では、VP様態副詞の非手指形態素(NM形態素)の動詞への波及に注目し、その動詞への波及にかかる条件「線状的隣接性条件」を提案した。この条件を満たした上で、目的語省略文の派生を考えると、目的語省略文の派生に関する分析としては、「項削除分析」が妥当であると結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

JSLの生成統語論研究は、音声言語のそれと比べ記述的にも世界の手話言語研究に遅れをとっている。従って、JSLのネイティブサイナーとの協働調査の下、「目的語省略文」における言語事実を記述することは学術資料としても大変重要である。また、本研究は音声言語にはない、手話言語特有の「同時外在性」に着目し、非手指形態素の外在化の事実を丹念に観察し、新たな視点からの分析を提案できたところに意義がある。また、ろう・聴の研究者が共に集い、議論できるコロキウムを開催する中で、ろう者への情報保障を意識した運営を実施できたことは、さらなるバリアフリーの学術交流に向け、充分な社会的意義があったと考える。

研究成果の概要(英文)： This project has explored the derivation of object dropping sentences in Japanese Sign Language, in which the object does not have a phonetic form. The main syntactic analyses in spoken languages for this type of constructions are: (i) "verb stranding vP ellipsis (VSvPE) analysis," in which the vP (verb phrase) is deleted after the verb moves out of the elliptical domain (vP), and (ii) "argument ellipsis ("AE") analysis," in which only the argument is deleted. We focused on spreading phenomena of non-manual morphemes (NM morphemes) of VP-manner adverbs to verbs, and proposed a condition on the spreading of NM morphemes: the linear adjacency condition on NM morpheme spreading of manner adverbs. Considering the derivation of object dropping sentences under this condition, we concluded that the "AE" analysis is more appropriate than the "VSvPE" analysis for the derivation of object dropping sentences in JSL.

研究分野：言語学，統語論

キーワード：手話言語学 項削除 動詞句削除 手指 非手指 形態素 同時性 外在化

1. 研究開始当初の背景

(1)に示した目的語を欠いている文(以後、現象として「目的語省略文」と呼ぶ)は、音声言語においては、生成統語論の枠組みで様々な分析が提案されてきた。主な分析としては、①動詞残留型動詞句削除(Verb-Stranding *vP* Ellipsis)分析(以後、VS*vPE*分析): Otani & Whitman 1991, Funakoshi 2011, 2012, 2016, 2017 他), ②項削除(Argument Ellipsis)分析(以後、AE分析: Oku 1998, Takahashi 2008, Sakamoto 2017 他)などがあげられる。

(1) 田中は 昨日 車を 丁寧に 洗ったが、佐藤は △ 洗わなかった。

しかしながら、日本手話(以後、JSL)の当該相当文の生成統語論研究としては、Sakamoto and Matsuoka (2016)(口頭発表)のVS*vPE*分析の提案がほぼ唯一の研究という状態であった。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は以下の3つであった。(i) (1)の文に相当すると考えられるJSLの(2a, b)が、どのような統語的・形態的特性(事実)を有するのか、JSLのネイティブサイナーとの協働調査の下、記述すること。(ii) (2b)の派生には、どのような分析が妥当であるのかを明らかにすること。(iii)本研究の成果をろう者・聴者が共に共有できる形で社会へ発信すること。

- (2) a. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}} \text{ YESTERDAY CAR } \frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}} \text{ WASH PT}_{\text{TANAKA}}$
 ‘田中は昨日車を丁寧に洗った’
- b. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{SATO}} \triangle \text{ WASH } \frac{\text{NEG}}{\text{NEG}} \text{ PT}_{\text{SATO}}$
 ‘(lit.) 佐藤は洗わなかった’

3. 研究の方法

手話言語には、音声言語にない「同時外在化」という特性がある。音声言語では、外在化器官が、音声しかないため、複数の形態素を同時に表出することができない。すなわち、時間軸上に線状に並べて表出するしかない。一方、手話言語には、外在化器官が手指、非手指(眉、口の形、頭の動き、顔の向き、肩の動き、上半身の傾きなど)複数存在し、それらにより、異なる形態素を同時に表出することができる。本研究では、VP 様態副詞の非手指形態素の動詞への波及を手がかりに、日本手話の目的語省略文の分析に関して、上記②の項削除(AE)分析が妥当であることを示した。

4. 研究成果¹

音声言語のVP 様態副詞(以後、様態副詞)「丁寧に」に相当すると思われるJSLの語は、手指形態素 *CAREFULLY* と非手指形態素 $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ (口角の緊張、目細め、眉しかめ)からなる(3)。手話言語では、副詞の非手指形態素が他の文要素と同時に現れることが多いことが広く報告されており(Sandler and Lillo-Martin 2006, 岡・赤堀 2011)、日本手話においても、(4a, b)のように様態副詞の非手指形態素を動詞へ波及させ、動詞と同時に表出することが可能である。

- (3) $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ ← 非手指形態素
 ← 手指形態素
- (4) a. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}} \text{ YESTERDAY CAR } \frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}} \text{ WASH PT}_{\text{TANAKA}}$
 ‘田中は昨日車を丁寧に洗った’
- b. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}} \text{ YESTERDAY CAR } \frac{\text{CAREFULLY}}{\text{WASH}} \text{ PT}_{\text{TANAKA}}$

上田・内堀(2019, 2021a)では、下記(5a-c)の対比から、この種のJSLの様態副詞に関して、一見中心的と思われる手指形態素 $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ はその外在化に対し任意要素で、むしろ非手指形態素 $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ の方が義務的要素であることを示した(5a, b)。ただし、当該非手指形態素は拘束形態素で何らかの手指形態素と同時に外在化されなければならないことも示した

¹ 本研究は愛媛地方出身のJSLネイティブサイナーへの調査に基づく。また、本研究課題においては、当初RS(ロールシフト、リファレンシャルシフト)の実態が不明な点が多く、観察が複雑になると考え、RSを全て外した調査・記述を行ったが、協働調査を行うネイティブサイナーの助言を受け、現在進行中の基盤(C)(研究課題番号:21K00528)において、RSを含めた調査・記述を行っている。

(5a, c)。

- (5) a. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY CAR $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{WASH}}$ PT_{TANAKA} /
- b.* $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY CAR CAREFULLY WASH PT_{TANAKA} /
- c.* $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY CAR $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{WASH}}$ PT_{TANAKA} /

さらに、上田・内堀 (2019, 2021a) では、(4b)や(5a)に見られる様態副詞の非手指形態素の動詞への波及可能性に対し、(7a-c)の観察から、(6)「VP 様態副詞の非手指形態素の外在化における線状的隣接性条件」(以後、「線状的隣接性条件」)を提案した。

- (6) VP 様態副詞の非手指形態素の外在化における線状的隣接性条件
VP 様態副詞の非手指形態素の動詞への波及は、様態副詞の手指形態素と動詞が線状的に隣接していなければならない。

- (7) a. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY **CAR** $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ WASH PT_{TANAKA} /
‘田中は昨日車を丁寧に洗った’
- b.* $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ **CAR** $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{WASH}}$ PT_{TANAKA} /
- c.* $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ **CAR** WASH PT_{TANAKA} /

この「線状的隣接性条件」が正しいとすると、(8a) (= (4b), (5a)) のように様態副詞の手指形態素は表出されず、非手指形態素のみが動詞に波及している場合も、(8b) が示すように、音形を持たない手指形態素が存在していると考えられる²。

- (8) a. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY CAR $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{WASH}}$ PT_{TANAKA} /
- b. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY CAR $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{音形}}$ WASH PT_{TANAKA} /

上田・内堀 (2019, 2021a) では、上記までに見た様態副詞の非手指形態素の動詞への波及およびそれに課される条件「線状的隣接性条件」を用いて、(2b)の JSL の目的語省略文には、上記② AE 項削除 (AE) 分析が妥当であることを主張した。

項削除の証拠 1 としては、(9b) (= (2b)) には、様態副詞の解釈がないことがあげられる。副詞解釈がないことは、(9a, b) の後に (9c) をつなげて発話するのは文脈上不自然であるとの JSL ネットタイプサイナーの判断により示される (% は文脈的つながりが受け入れられないことを示す)。

- (9) 【文脈】田中と佐藤は同じタクシー会社で働いているタクシードライバー。この会社では、ドライバーが自分の車を清掃することになっている。田中と佐藤の上司が田中と佐藤の清掃振りを社長に報告している。(田中と佐藤はここにはいない。)
- a. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY CAR $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ WASH PT_{TANAKA} /
‘田中は昨日車を丁寧に洗った’
- b. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{SATO}}$ Δ WASH $\frac{\text{NEG}}{\text{NEG}}$ PT_{SATO} / ‘佐藤は車を洗わなかった’
*佐藤は車を丁寧に洗わなかった’
- c.% $\frac{\text{ROUGHLY}}{\text{ROUGHLY}}$ WASH PT_{SATO} / ‘(佐藤は) 雑に洗った’

さらに、(10b) のように動詞 WASH に様態副詞の非手指形態素 $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ を波及させれば、文脈上の不自然さはなくなることも確認した。

- (10) a. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}}$ YESTERDAY CAR $\frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}}$ WASH PT_{TANAKA} /
‘田中は昨日車を丁寧に洗った’

² 前述したように、様態副詞の非手指形態素が拘束形態素だとすれば、手指形態素が外在化されなければ、非手指形態素も外在化されず、波及した動詞とのみ同時に表出されることとなる。

- b. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{SATO}} \triangle \frac{\text{CAREFULLY}}{\text{WASH}} \frac{\text{NEG}}{\text{NEG}} \text{PT}_{\text{SATO}} / \text{‘佐藤は丁寧に車を洗わなかった’}$
 c. $\frac{\text{ROUGHLY}}{\text{ROUGHLY}} \text{WASH} \text{PT}_{\text{SATO}} / \text{‘(佐藤は) 雑に洗った’}$

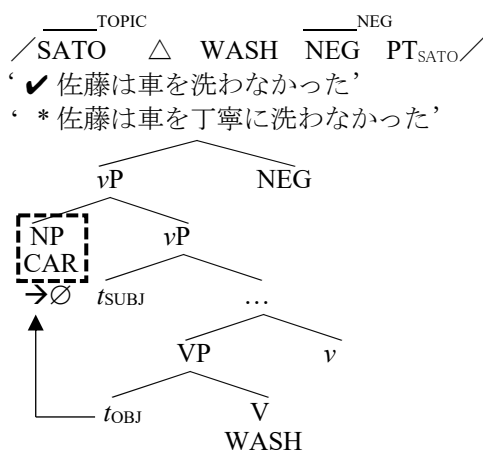
(9)-(10)の対照性により、目的語省略文においては、動詞に様態副詞の非手指形態素が波及され外在化されていなければ、様態副詞の解釈は生じないということがわかる。(9b)に様態副詞の解釈がないという事実は、①VS*v*P分析では説明できない。一方、②AE分析は、項のみが削除されるため、副詞解釈がないことは容易に説明できる。

証拠2は、(9b)の動詞 *WASH* の代わりに、代動詞 DO (DO やる) が現れた時の解釈の違いである。(9b)と異なり、(11b)は様態副詞の解釈の有無に関して2通りの解釈が可能となる。

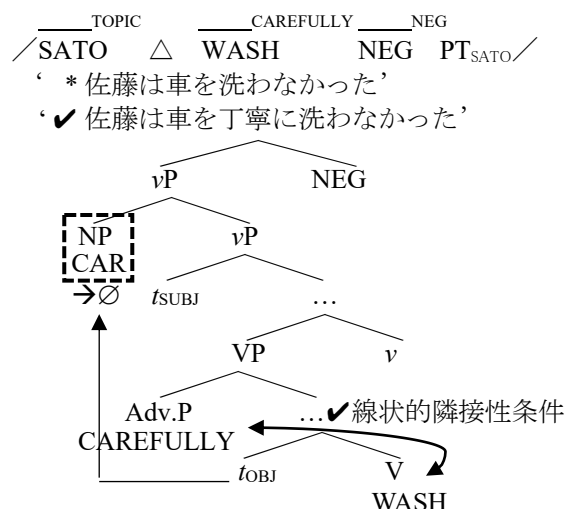
- (11) a. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}} \text{YESTERDAY} \text{CAR} \frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}} \text{WASH} \text{PT}_{\text{TANAKA}} / \text{‘田中は昨日車を丁寧に洗った’}$
 b. $\frac{\text{TOPIC}}{\text{SATO}} \triangle \text{DO} \frac{\text{NEG}}{\text{NEG}} \text{PT}_{\text{SATO}} / \text{‘佐藤は車を洗わなかった’}$
 ‘佐藤は車を丁寧に洗わなかった’

この副詞解釈の有無の対照性は、一般動詞を伴う(9b)では項削除が、代動詞 DO を伴う(11b)では様態副詞を含む動詞句(*v*P)削除が関与していると考えれば容易に説明される。言い換えれば、削除領域が項(NP)の大きさの場合には、結果的にそのまま動詞が残り、(9b)のように外在化することになる。もちろん、動詞に波及が様態副詞が生じていなければ様態副詞解釈も生じない。(12)がそれぞれの部分的派生構造である³。

(12) a. 項削除 (=9b))

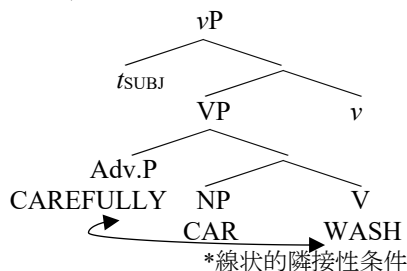


b. 項削除 (=10b))



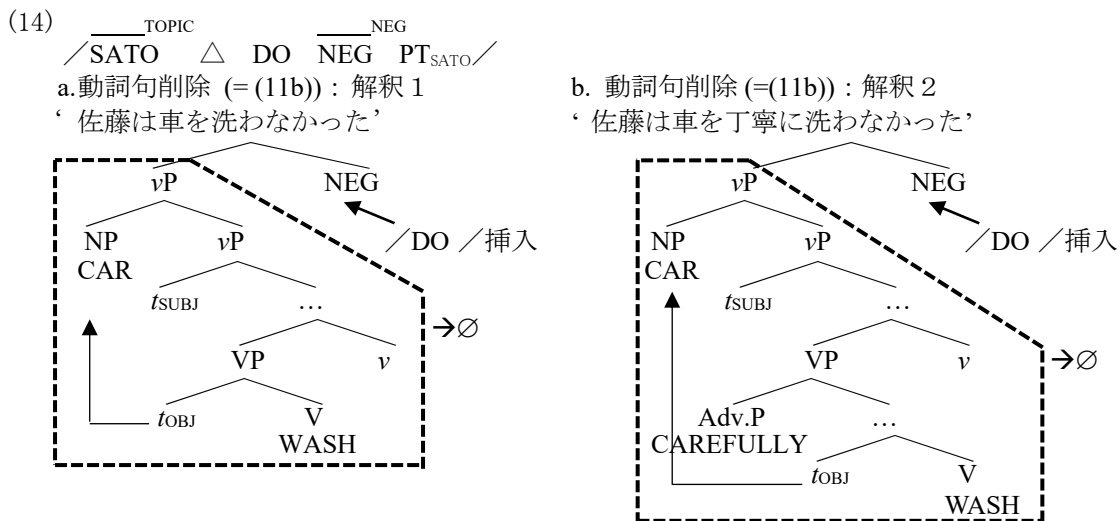
上記(7b, c)にあげた「副詞-目的語-動詞」の語順((13)として再録)において、様態副詞の非手指形態素の波及が許されないのは、(7)の語順は、object shiftが生じていない状態であり、その結果、「線状的隣接性条件」に抵触し、外在化の際に形態的に許されないと説明される。

- (13) a.* $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}} \text{YESTERDAY} \frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}} \text{CAR} \frac{\text{CAREFULLY}}{\text{WASH}} \text{PT}_{\text{TANAKA}} / (= (7b))$
 b.* $\frac{\text{TOPIC}}{\text{TANAKA}} \text{YESTERDAY} \frac{\text{CAREFULLY}}{\text{CAREFULLY}} \text{CAR} \text{WASH} \text{PT}_{\text{TANAKA}} / (= (7c))$



³ 上田・内堀(2019, 2021a)では、目的語は object shift を生じているとのみ述べたが、上田・内堀(2021b)および現在進行中の基盤(C)(研究課題番号:21K00528)において、RS(ロールシフト・レファレンシャルシフト)を含めた調査・記述の中で、この目的語の移動に関するより詳細な提案を行っている。

一方で、削除領域が動詞句 (vP) の場合は、動詞句内のすべての要素が削除されるため、動詞への波及の有無に関わらず、様態副詞を元の動詞句が含んでいれば、副詞解釈が可能となる。ここでは、英語の do-挿入と同様に、動詞句外にある主要部の持つ何がしかの拘束形態素を満たすべく、最後の手段として、/DO/ (/やる/) が挿入され、代動詞として外在化されると考えられる。(14a, b)がその2通りの解釈の部分的構造である。



生成統語論研究において、この語彙動詞と代動詞の対照に関する本研究結果の示唆するもう一つの重要な点は、本分析が正しければ、JSL では動詞 (V) の主要部移動は生じてないということになる。②AE 分析を支持するだけでなく、VtoT 主要部移動がないとする分析は、JSL の目的語省略文に関する生成統語論研究では初出と言える。Sakamoto and Matsuoka (2016) および坂本 (2023) では、動詞の主要部移動を前提とする①VS vPE 分析を支持している点で異なる。本研究は、音声言語にはない同時外在化現象である VP 様態副詞の非手指形態素の動詞への波及から JSL の省略文分析に新たな可能性を提案した。

上記研究成果を受け、CL の種類に注目して、JSL の CL 動詞文における削除現象についても検討している (上田・内堀 2021b)。

以上の研究成果を含む、本研究課題の成果を、ろうと聴の研究者が共に集い、学術情報を共有する場を設け、社会へ還元・配信することも目的の1つであった (上記研究目的(iii))。その試みとして、以下を実施した。1) 慶應言語学コロキウム『言語学的アプローチによる手話研究の現在』を開催し、ろう・聴の講師を迎え、それぞれの研究発表の後、ろう・聴の参加者が日本手話の通訳を介して質疑応答や意見交換を行なった (令和3年3月20日、慶應義塾大学: Zoom 開催)。2) 本研究課題の成果発表の際には、ろうの参加者に向けての情報保障をできる限り試みた。本研究課題の成果発表の全てに手話通訳をつけ、可能な範囲で字幕・口述筆記をつけた。

今後の研究課題としては、本研究課題で取り上げた、VP 様態副詞の非手指形態素の波及の可能性を RS の表出との関係も絡めて、記述・分析していく必要があり、その上で、JSL の文要素の省略についてさらなる検討が望まれる。その一部は既に開始され、口頭発表している (脚注 2, 3 参照)。

参考文献 (抜粋)

- Funakoshi, K. 2016. Verb-stranding verb phrase ellipsis in Japanese. *JEAL* 25: 114-142.
- Oku, S. 1998. A theory of selection and reconstruction in the Minimalist Perspective. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Otani, K. & J. Whitman. 1991. V-raising and VP-ellipsis. *LI* 22:345-358.
- Sandler, W. and D. Lillo-Martin. 2006. *Sign Language and Linguistic Universals*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Sakamoto, Yuta. 2017. Escape from silent syntax. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Sakamoto, Y. & K. Matsuoka. 2016. Missing objects in Japanese Sign Language, paper presented at WAFL 12. Central Connecticut State University, USA.
- 上田由紀子・内堀朝子. 2019. 「日本手話における非手指副詞、動詞、目的語の語順について」『日本言語学会大 158 回大会予稿集』 342-248.
- 上田由紀子・内堀朝子. 2021a. 「日本手話のいわゆる動詞句削除現象: 非手指表現に注目して」『言語科学研究』 27: 23-46. 神田外語大学大学院.
- 上田由紀子・内堀朝子. 2021b. 「日本手話の削除現象から見えてくること: 動詞句削除現象から」(口頭発表) 慶應言語学コロキウム『言語学的アプローチによる手話研究の現在』(2021年3月20日、オンライン開催).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 内堀朝子・今西祐介・上田由紀子	4. 巻 -
2. 論文標題 文末指さし	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『手話言語学のトピック:基礎から最前線へ』	6. 最初と最後の頁 113-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上田由紀子・内堀朝子	4. 巻 27
2. 論文標題 日本手話のいわゆる動詞句削除現象－非手指表現に注目して－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語科学研究	6. 最初と最後の頁 23-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masayuki Komachi, Hisatsugu Kitahara, Asako Uchibori, Kensuke Takita	4. 巻 50
2. 論文標題 Generative Procedure Revisited	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 269-283
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 上田由紀子・内堀朝子
2. 発表標題 日本手話（愛媛方言）における接続詞としての非手話表現（NMM）について
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 内堀朝子・上田由紀子
2. 発表標題 日本手話（愛媛方言）に見られるいわゆる等位接続構造制約違反について
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上田由紀子・内堀朝子
2. 発表標題 日本手話の空目的語－非手指表現の観察と分析
3. 学会等名 日本英文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上田由紀子・内堀朝子
2. 発表標題 日本手話におけるいわゆる動詞句削除現象－SASSによるCL動詞に注目して
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内堀朝子
2. 発表標題 「Strong Minimalist Thesisを満たすUGの説明理論：その輪郭と概念的根拠」 - JSLで見る Set formation/Form sequenceと数素性的一致
3. 学会等名 日本英文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上田由紀子・内堀朝子
2. 発表標題 日本手話の削除現象から見えてくること：動詞句削除現象から
3. 学会等名 慶應言語学コロキウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 内堀朝子
2. 発表標題 手話言語学春期講座統語論
3. 学会等名 東京手話言語学研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上田由紀子, 内堀朝子
2. 発表標題 「日本手話における非手指副詞, 動詞, 目的語の語順について」
3. 学会等名 日本言語学会第158回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内堀朝子
2. 発表標題 「日本手話の統語分析：WH, 指さし, 動詞句などを例として」
3. 学会等名 慶應言語学コロキウム「手話言語学夏期講座」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内堀朝子
2. 発表標題 「手話って何? ~言語学から見て」
3. 学会等名 杉並区手話講習会特別講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内堀朝子・上田由紀子
2. 発表標題 「日本手話における動詞句削除と目的語項削除」
3. 学会等名 生成文法研究会(慶應義塾大学)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上田由紀子・内堀朝子
2. 発表標題 日本手話における非手指副詞, 動詞, 目的語の語順について
3. 学会等名 日本言語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Asako Uchibori
2. 発表標題 Some Notes on Syntactic Functions of Finger Pointing in Japanese Sign Language
3. 学会等名 新学術領域研究「共創的コミュニケーションのための言語進化学」, 言語理論班・認知発達班シンポジウム「手話言語と言語進化」 Evolinguistics Meets Signed Language (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小町将之, 瀧田健介, 内堀朝子, 北原久嗣
2. 発表標題 併合手続きを再考する
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会ワークショップ
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松岡和美・内堀朝子（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 292
3. 書名 手話言語学のトピック:基礎から最前線へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤巻 一真 (Fujimaki Kazuma) (60645985)	神田外語大学・外国語学部・准教授 (32510)	
研究分担者	内堀 朝子 (Uchibori Asako) (70366566)	東京大学・大学院工学系研究科(工学部)・准教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------